

三好達治全集

10

好達治全集

10

筑摩書房

三好達治全集第十卷

昭和三十九年十二月二十五日發行

著者 三好達治

發行者 古田晁

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七六五一（代表）

振替 東京 四一一二三

印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 鈴木製本所

三好達治全集第十卷目次

山泉雜記

小動物	一
小動物	二
小動物	三
小動物	四
淺間山	五
山	六
鷺	七
鷺・鴉・燕	八
鵲鳩	九
起居雜錄	十
錢湯	十一
山泉雜記	十二
新秋雜記	十三
新雪遠望	十四
徒步消閑	十五
鳩の浮巢	十六

鷺と檜鳥——山泉雜記		七
------------	-------	---

小田原雜記

信州發哺溫泉		二三
一墓碣		二五
山雨雜記		二九
鎌倉雜記		三七
半日閑歩		四一
河鹿		四四
二百十日		四七
松風山雜錄		五三
小田原雜記		五九
春雪		六五
早春一日記		七〇
小庭記		七二
木兔		七四
鵲鴿		七九

淺春雜話	一八一
觀世音寺	一八四
葉書隨筆	一九〇
來宮さま	一九一

野處雜記

冬夜傾聽記	一九九
碧落	二〇二
春の來る庭	二〇三
書中の風姿	二〇五
唐辛子	二一〇
ものの名	二二一
正覺坊	二二二
淺春語	二二五
柘榴の花	二二六
小鳥その他	二三〇
寒林一日	二三六

海濱雜記	三三
野處雜記	三五
秋の日の情感	三九
燈下雜記	四三
海邊の窓	三五
夏のをはりの日まはり	五九

燈下記

人違ひ	二五
一つの空白	二九
壁間所見	二三
オルゴール	二七
お花見日和	二七
燈下記	二九

秋艸道人の書 潮干の跡のやうに ある信心家
の面影 梶井基次郎のこと 堀口先生の詩境
棋家の文章など 對校試合の應援 小綬鶏の旅

校歌	三二三
謡にして正ならず	三二五
青山二郎装幀展	三三〇
春の岬	三三二
「日本畫の流れ」展を見る	三三四
冬日銷閑	三三七
書といふもの	三三九
某月某日	三三六
華岳・祐三展を見る	三三七
春風	三四一
冬日	三四三
木守り	三四四
ケシの花	三四五
カミナリテフ	三四八
牛島の藤	三五一
雁もどき	三五三
季節の言葉	三五四

酒	三五四
無用言	三五六
暮どの	三五八
穴風外——私の鑑賞	三六〇
木守り	三六三
路	三六四
ヒタキ	三六七

東京雜記

霜前菊後	三七一
月島わたり	三八〇
公園と街路	三九〇
銀座街頭	三九九
風味と幻影	四〇七
薄暮の新緑	四一六
空しき樹陰	四二五
明日のこゑ	四三四

草市や	四四二
晩夏半日	四五一
たき木拾ひ	四五九
風蕭々	四六九
解題	四七九

山泉雜記

小動物 一

私は餘り蛇を怖れない性質^{たち}である。一度こんな經驗をしたことがある。

洛外嵯峨に、嵐山電車を降りて渡月橋とは反對の方角に、釋迦堂といふのがある。もう十四年も昔のことなので、私はこの文章を書きながら、その釋迦堂の境内を思ひ出さうとしてみるが、道の正面に聳えてゐた山門の外、私の眼に浮んでくるものは、いつかうにみなとりとめがない。それでこの文章の前置きに、風景描寫をすることはたうてい出来ない。しかし次のことだけは、それに引かへ、はつきり記憶に残つてゐて、昨日のことのやうに眼に浮べることも出来る。

その境内のどこであつたか、ある建物の前の、石と石との隙間のところに少しばかり草の生えた、砌の上をちやうど私の歩いてゐた時、私の前を三尺ばかりの蛇が走つた。今から思ふに、どうもそれは、青大將だつたらしい。その蛇は、首から五寸ばかりのところに、一ところ、變な膨らみをもつてゐた。それが私の注意を惹いた。私は突嗟に、別段何の分別もなく、二三歩彼の後を追つて、その尻尾を、矢庭に靴で踏んづけた。私の靴底と石との間に、うまい具合に、彼の尻尾は捕へられた。私は一寸ぎよつとしながら、やはり何の分別もなく、ものの拍子といつてもいい行きがかりから、そんな風なことになつた、その私の立場を、その場の嫌惡に耐へて、暫く守りつづけてゐた。捕虜

となつたその蛇は、不意の災難に迷惑して、その上半身を、二三度左右に振つてみせたが、それでもいつかう尻尾を放して貰へない、——その場の事情を、彼なりに、何と合點したのであらうか、一寸静かに落ちつくと、今度は、先ほど私の注意を惹いた膨らみ、その腹中の一物を、身悶へといふほどのものも見せずに、器用に吐き出しにかかつたのである。その時の彼の表情は惡戯小僧が素直に降参したといふ、ただそんな、無邪氣なものに眺められた。私は少し興味を覺えて、その彼の膨らみが、小刻みに少しづつ、頭の方へ近づいてくる、吐逆の様子を見まもつてゐた。やがて彼は、鎌首を一寸もたげて、こつくりと、眼の前の土の上に、黒いものを吐き出した。それは一匹の蛙だつた。唾液のやうなものに濕れた、その蛙は、腹匍ひに置かれたまま、既に正氣を喪つて、ぐつたりとして動かなかつた。しかしそれから一二瞬の後、つぶれたやうにへたばつてゐたその蛙は、うつけた氣持でそれを見てゐた私の眼の下で、大きく一つ息を吸つた。二三度呼吸を繰返した。それからむつくり起き直つた。さうして後脚に力をこめて、退儀さうに土を蹴つたが、思ふやうには躍べなかつた。それでも二三度躍んでゐると、頭がはつきりしたもののか、今度は急に活潑に、力いっぱい躍びはじめた。さうしてすぐに、叢に隠れてしまつた。私の捕虜はその間も、微かな音をたてながら、迷惑さうに藻掻いてゐた。私は彼を釋放した。彼もまた一瞬の間に、私の前から姿を消した。極まり惡さうに、こそこそと、乾いた土の上を走つた彼の姿は、一寸氣の毒のやうでもあつた。一つの命から、もう一つの命をとり出して、とにかくそれを二つのものに引分けて野に放つた、そんなことが、その時の私を、一寸得意な氣持にした。

これは、とある田舎で見かけた話。

その時私は、年若い友人と同道して、一つの土橋に通りかかった。初夏の蒸し暑い日であつた。ここかしこ楊の新緑が煙つてゐる、その河原の風景は、嘗て私の旅行した、朝鮮北部の、やはりそんな河原の風景に似通つてゐた。折からの微風に、楊の絮もとんできた。私達が、その土橋の、橋の袂にさしかかると、それまでその水際で、何かを漁つてゐたらしい二人の子供が、橋の陰から現れて、ちよこちよこ走りで、私達に先んじてその橋を渡らうとした。手には罐を持つてゐる。私は思はず、その罐を覗きこんだ。罐の中は私にはよく見えなかつた。

——何をとつたの？

私は同時に言葉で尋ねた。

——かじか。

一人の子供がさう答へた。

——かじか？

——かじかがへる。

その子供は、二度目には、丁寧にさう答へて、鯀ではない河鹿だといふことが、その時はもう嚙みこめた私の前に、その罐の中から、一匹の河鹿を掴み出して、額の上の、私の顔に眼をあげた。それを私に、通りすがりの旅人に、くれるつもりだつたらしい。

——ああ、さう、かじかがへる。かじかがへるだね。

私はさう、なだめるやうに返辭をした。——欲しいのではない、ありがたう、といふ位のつもり

であつた。するとその子供に、私の氣持が解つたものか、さてその上で、どう思つたのか、彼はそれを強て私にくれようとは、その身ぶりにもその言葉にも、露には現さないで、そのままそこにしやがみこむと、その手の中に握つたものを、土の上に置いてみせた。——欲しければ、上げるよ、とてもいふほどのつもりだつたものらしい。土に置かれたかじかがへるは、子供の小さな手の下から、早速びよんびよん跳びはじめた。

——どうしたの、いらんのかい、逃げつちまふよ。

私はそんなことを云つた。いとけない私の相手の、露はに云へば反省を促したのである。

——いらん。

私の相手は、ただひと言、うつむいたままでさう答へた。子供の心境といふものは忽ちのうちに變化する。私は一寸まごついて、言葉に窮した。

その間も、河鹿はびよんびよん橋の面を跳んでゐる。今度はそれが氣になつた。斜めにそこを跳んでゐた、その河鹿は、もう橋の上を跳びつくして、その方向に跳ぶつもりならもう跳ぶ餘地もなくなつた。どうするだらう、そんな勢ひで跳びつづけて、危ない……

私がさう思つた途端に、河鹿は一層勢ひよく、びよこんと一つ跳び躍ねた。さうしてそのまま、溪流の中に跳びこんだ、二間ばかりも水面を離れた橋の上から。

河鹿といへば、私にはまた、一寸忘れられない思出がある。

まだ學校へも上らない子供の頃、私は一度、山陰地方のある町へ、貰ひ子に貰はれていつたこと